

ける。十六と申しける承安四年の春のころ、五條の橋次末春といふ金商人に相具して、東國へ下りける道にて、自ら男になりて、九郎義經と名のる。奥州の權太郎秀衡に對面す。かくて暫く徘徊せし程に、兵衛佐の謀叛の企と聞えしかば、義經悦び馳せ上る。金澤といふ所にて、兄に見參す。昔今の物語し、互に悦び給ふ事斜ならず。信濃國住人、木曾冠者義仲、是も高倉の宮の令旨を賜りて謀叛を起す間、信濃上野を始として、北陸道七箇國打ち靡かし、都に上りて、平家を攻め落して、天下を我儘にする間、今は院の御所法住寺殿に推し寄せて、月卿雲客に所もおかず、合戦して放火し焼き拂ふ。しかのみならず、院をも五條の内裏に押籠め進らせて、公卿殿上人をも、官職を停めて追籠めらる。依之公家より關東に御使ありて、事の子細を仰せらるゝ間、兵衛佐大に驚き、舍弟蒲の冠者範頼、九郎冠者義經を大將として、六萬餘騎を差し上す。元暦元年正月廿日都に入る。木曾左馬頭を攻落して、大津の粟津にて首をとる。其後平家追討のために、攝津國一の谷に發向する處に、熊野別當教眞が子息五人をば、本宮、新宮、那知、若田、田邊五箇所に分けて置く。此中に何れも長じたらん者を、別當を繼すべしと遺言したりけるが、其比は田邊の湛増長じたりければ、別當にてぞありける。湛増別當申しけるは、源氏は我等が母方なり、源氏の代とならん事こそ悦ばしけれ。兵衛佐頼朝も、湛増がためには親しきぞかし。其弟範頼、

義經、佐殿の代官にて、木曾追討し、平家攻に下さるゝよし、その聞えあり。源氏重代の劍、本は膝丸蜘蛛切、今は吼丸とて、爲義の手より、教眞得て權現に進らせたりしを、申請けて源氏に興へ、平家を討たせんとて、權現に申し給ひて、都に上り、九郎義經に渡してげり。義經特に悦びて、薄縁と改名す。其故は、熊野より春の山を分けて出でたり。夏山は縁も深く、春は薄かるらん。されば春の山を分け出でたれば、薄縁と名づけたり。此劍を得てより、日來は平家に隨ひたりつる山陰山陽の輩、南海西海の兵共、源氏につくこそ不思議なれ。二月三日源氏は都を出で、一の谷に向ふ。軍兵を二手に分けて、範頼大將軍にて、五萬餘騎攝津國より推し寄せ、後結の大將軍義經、三草山より發向す。大手、搦手同心に、七日の卯時より巳の時に至るまで、散々に戦ふ。源氏軍に打勝ちて、平家はかけまけ、思ひくゝに落ちにけり。平家の大將軍越前三位通盛以下、八人まで討たれけり。同十三日、首ども大路を渡して、獄門の木に懸く。其恩賞には、八月六日に、九郎御曹司左衛門尉になり、頓て院の宣旨を蒙りて、五位尉にとゞまる。大夫判官とぞ申しける。蒲の御曹司範頼は、三河守に成されけり。同二年二月十一日に、又平家攻に渡らんとて、渡部神崎にて、船揃をしける時、九郎判官と梶原平三と、船に逆櫓立てう立てじの口論して、中和になりにけり。されども義經は、大風にも恐れずして、僅に船五十艘に取乗りて、五十餘騎



にて馳せ渡る。梶原は此意趣にやありけん、大風にや恐れけん、翌日にぞ渡しける。義経は案内者をして、屋島の館を焼き拂ふに、三月廿二日には、長門赤間關に馳せ向ふ。範頼は九國の軍兵を相具して、豊前國、門司の關に向ひ、平家を中に取籠めて、互に限とぞ戦ひける。終に平家攻落されて、先帝をば二位殿負ひ進らせて、海に入らせ給ひけり。前の内大臣殿以下三十八人は虜られけり。判官殿在々所々にて、多くの戦しけれども、一所も疵を被らず。毎度の軍に打ち勝ち、日本國に名を揚げしことも、只此劍の力なり。義経、南海西海を討優せ、平家の虜共相具して、三種の神器諸共に、都へかへし入れ奉りけり。但三種の神器の内、寶劍は失せにけり。内侍所と神璽とばかり上らせたまふ。

抑々帝王の御寶に、神璽、寶劍、内侍所とて三つあり。凡そ神璽と申すは、神代より傳りて、代々の御帝の御守りにて、驗の箱に納めけり。此箱開く事なく、見る人もなし。依之、後冷泉院の御時、いかゞ思しけん、此箱を開かんとて、蓋を取り給ひしに、忽に箱より白雲立上り給ひけり。良ありて雲は元の如く返り入らせ給ひぬ。紀伊内侍、蓋覆つて緘げ納め奉る。日本は小國なりといへども、大國にまさる事は是なりとぞ申しける。一天の君、萬乘の主だにも、御心に任せずして、御覽ぜられぬものなれば、まして凡人いふべきにあらず。況や凡下に於てをや。神璽と

は、神の印といふ文字なり。神のおしてといふは、如何なる子細にて、帝王の御寶とはなるやらん覺束なし。委しく是を尋ねれば、我朝の起より出でたり。天神七代のはじめ、國常立尊、此下に國なからんやとて、天瓊矛を降して、大海の底を搜り給ふに、國なければ鋒を引上げ給ひけるに、矛の滴落ち留り、凝まり、島となりにけり。吾朝の出で来るべき前表にて、大海の浪の上に、大日といふ文字浮べり。文字の上に鋒の露留りて島となるが故に、大日本國と名づけたり。淡路國は是日本のはじめなり。國常立尊より三代は、男の姿のみ顯れて、女の姿はなし。第四代の泥土瓊尊より第六代の面足尊まで三代は、男女の姿これありといへども、夫婦婚合の義はなかりけり。第七の伊弉諾、伊弉册尊、淡路國に下りて、男女婚合あらはれり。山石草木をうゑ給へり。大八島の國を造り、次に國の數を造り、又世の主なからんやとて、一女三男を生み給ふ。所謂、日神、月神、蛭子、素盞鳴尊なり。日神と申すは、伊勢大神宮、天照大神是なり。月神と申すは、月讀尊、高野丹生大明神と號す。蛭子は三年まで足立たぬ尊とて御座ければ、天石櫛樟舟に乗せ奉り、大海が原に推し出して、流され給ひしが、攝津國に流れ寄りて、海を領する神となりて、夷三郎殿と顯れ給ひて、西宮におはします。素盞鳴尊は、御意荒しとて出雲國に流され、後には大社となり給へり。さて伊弉諾伊弉册尊は、國をば天照大神に譲り、山をば月讀尊に



奉り、海をば蛭子領し給へり。素盞鳴尊は分領なしとて、御兄達と度々合戦に及ぶ。依之不孝せられて、雲州へぞ流されける。さて天照大神は、日本を譲り得給ひながら、心のまゝにも進退せず。第六天の魔王と申すは、他化自在天に住して、欲界の六天を我儘に領せり。しかも今の日本國は、六天の下なり。我領内なれば、我こそ進退すべき處に、此國は大日といふ文字の上に出て來る島なれば、佛法繁昌の地なるべし。是よりして、人皆生死を離るべしと見えたり。されば此には人をも住せず、佛法をも弘めずして、偏に我が私領とせんとして免さずありければ、天照大神力及ばせ給はで、三十一萬五千載をぞ經給ひける。讓をば請けながら、星霜積りければ、大神魔王に逢ひ給ひて曰く、「然るべくは、日本國を讓の任を免し給はゞ、佛法をも弘めず、僧法をも近づけじ」とありければ、魔王心解けて、左様に佛法僧を近づけじと仰せらる。疾々奉るとて、日本を始めて赦し與へし時、手驗にとて印を奉りけり。今の神璽とは是なり。次に寶劍と申すは神代より傳はれる靈劍二つありと見えたり。天叢雲の劍、天羽々切の劍なり。天の叢雲の劍は、代々帝の御守、即ち寶劍是れなり。天武天皇の御宇、朱鳥元年六月に、尾張國熱田の社に籠られたり。又天のはゞ切の劍は、本は十握の劍と申し、が、大蛇を截つて後は天羽羽切の劍と號す。大蛇の尾の名を、はゞといふ故なり。をろちとも名づく。彼の劍、後には大和國石上布留社に納まれり。

昔、素盞鳴尊は出雲の國に御座しける時、彼國の簸の河上の山に大蛇あり。尾首共に八つあり。八の尾八の谷に盤れり。眼は日月の如し。背には苔むして、諸の本草生ひたり。年々人を呑む。親を呑まれては子悲み、子を呑まれては親悲む。村南村北に哭する聲絶えず。國中の人種皆取り失はれて、今は山神の夫婦、手摩乳、脚摩乳ばかり残り。一人の娘あり、稻田姫と名づけて、生年八歳なり。是を中に置きつゝ、泣き悲む事限りなし。尊哀み給ひて、よしを如何にと問ひ給ふ。手摩乳答へて曰く、「我に最愛の娘あり、稻田姫と申すを、今夜八岐の大蛇のために呑まれん事を悲むなり」と申しければ、尊不便に思召し、「娘を我に得させば、大蛇を討ちてとらせんことはいかに」と宣へば、手摩乳、脚摩乳、大に悦ぶ色見えて、「大蛇をだに討ち給はゞ、娘を進らせ候ふべし」と申しければ、尊大蛇を討ち給ふべき謀をぞ爲し給ひける。床を高く掻き、稻田姫を嚴しげに装束させて舂に湯津爪櫛を差して立てられたり。四方には火を焼き廻して、火より外に甕に酒を入れて、八方に置く。夜半に及びて、八岐大蛇來りつゝ、稻田姫を呑まんとするに、床の上にあると見れども四方に火を焼き廻したれば、寄るべき様なかりけり。時移るまで能く見れば、稻田姫の影、甕の酒に映り見えたりけり。大蛇これを悦び、八の甕に八の頭を打ち潰して、飽くまで酒を呑みてげり。餘りに飲み酔ひて、前後もしらす臥したりけり。尊、劍を抜き持ちて、大蛇を



寸々に切り給ふ。其八の尾に至りて、劍のかゝはる處あり、怪みて是を見給へば、劍の双白みたり。尾を裂きのけてこれを見るに、一の劍あり。是最上の劍なりとて、天照大神に奉る。天叢雲劍と名づく。此劍大蛇の尾に在りし時、黒雲常に覆ふ。故に天叢雲劍と名づけたり。此大蛇は、尾より風を出し、頭より雨を降らす。風水龍王の天降りけるなり。手摩乳は、姫の助りたる事を喜び、尊を掣に取り奉る時、圓さ三尺六寸の鏡を引出物に奉る。稻田姫尊に参りし時、卵にさし、湯津爪櫛を後さまに投げて、始めて尊に参り給ふ。別の櫛とはこれなり。尊は出雲國に宮作して、稻田姫を妻室とし、婚合し結へり。兄達と不和の事、悪しくや思召されけん、蛇の尾より取り出でたる天叢雲劍、并に天羽々切劍、手摩乳が掣引出物の鏡、以上三種を、天照大神に奉りて、不孝は許され給へり。かの掣引出物の鏡は今の内侍所是なり。人皇第四代の帝、懿德天皇の御時、天より三の鏡降り。其中一は掣引出物の鏡なり。二は天照大神の、天の岩戸に閉籠らせ給ひし時、我形を鑄移し留めて、子孫此鏡を見ては、我を見るが如くに思へとて、寫し給へる鏡なり。始鑄給へるは小しとて、又鑄直し給へり。始の御鏡は、紀伊國の日前の宮と祝はれ給へり。後の御鏡は伊勢國蓋見浦に、一里ばかりの沖に、岩に副うておはしますが、鹽の滿つる時は岩の上にあがり、鹽の干る時はさがりて、岩に副うておはします。海のなきたる時は、船にて推し渡りて、先達あ

りて拜むなり。掣引出物の鏡は内侍所なり。帝の御守にて大内におはしますを、第十代の帝崇神天皇の御時、同殿然るべからずとて、殿を作り鏡を鑄て、新しきを御守とし、古きをば天照大神に返し進らせ給ひけり。鑄移し給ふ御鏡も、作り替へられたる寶劍も、靈驗は少しも劣り給はず。然るに十二代の帝、景行天皇四十年の夏、東夷多く御政を背きて關東靜らす。帝の第二の皇子、日本武尊、御心も武く、御力も勝れて御座しければ、彼皇子遣して平げしに、同年冬十月に道に出でて、先づ大神宮に参り給ふ。やまと姫の尊をして、天王の命に隨ひて、東攻に赴く由を申されたりければ、崇神天皇の時、返しおかるゝ天叢雲劍を出し給ふ。日本武尊是を帶きて、東國に下り給ふに、道に不思議あり。出雲國にて素盞鳴尊に害せられたりし八岐大蛇天降り、無體に命を失はれ、劍を奪はれし憤散せず、今、日本武尊の帶きて、東國に赴き給ふを、せき留めて奪ひ返さんそのために、毒蛇となりて、不破關の大路を伏塞きたり。尊、事ともし給はず、躍り越えてぞ通られける。尾張國に下りて、松子の島といふ所に、源大夫といふ者の家に泊り給へり。大夫に娘あり、名を岩戸姫といひけり。眉目貌好かりければ、尊是を召して幸ひし給ふ。一夜の契深くして、互に志淺からず。かくてもあらまほしく思召しけれども、夷を攻めに下る者が、女につきて留らん事、悪しかりなんと思はれければ、返らん時又と憑みて、頓て打ち出で給ひけ



り。駿河國富士の裾野に到る。其國の兎徒、「此野に鹿多く候、狩して遊ばせ給へ」と申しければ、尊即ち出で遊び給ふに、兎徒等野に火をつけて、尊を焼き殺し奉らんとしける時、佩き給へる天叢雲の劔を抜きて、草を薙ぎ給ふに、刈草に火つきて、脅したりけるに、尊は火石、水石とて、二の石を持ち給へるが、先づ水石を投懸け給ひければ、即ち石より水出で、消えてげり。又火石を投懸け給ひければ、石中より火出で、兎徒多く焼死にけり。其よりしてぞ、其野をば天の焼そめ野とぞ名づけける。叢雲劔をば、草薙劔とぞ申しける。尊、振り捨て給ひし岩戸姫のこと、忘れ難く心にかゝりければ、山覆り江覆るといふとも、志のよしを彼の姫に知らせんとて、火石水石の二の石を、駿河の富士の裾野より尾張の松子の島へこそ投げられけれ。彼所の紀大夫といふ者の作れる田の、北の耳に火石は落ち、南の耳に水石は落つ。二の石留る夜、紀大夫の作りける田一夜が内に森となりて、多くの木生ひ繁りたり。火石の落ちける北の方には、如何なる洪水にも水出づることなく、水石の落ちたる南の方には、何たる旱魃にも水絶ゆる事なし。是火石水石の驗なり。尊は是より奥へ入り給ひて、國國の兎徒を平げ、所々の惡神を鎮め、同五十三年尾張へ歸り、又岩戸姫に幸ひし給へり。さてしもはつべき事ならねば、都へ上り給ひけるに、草薙劔をば記念せよとて、岩戸姫に渡し給ひしを、「我れ女の身なれば劔持ちて何かせん。只持ちて上

り給へと申されければ、存する旨ありとて、桑の枝にかけて、尊は上り給ひにけり。さる程に八岐の大蛇、伊吹大明神は、尊に跳り越えられて、え留めぬ事を本意なく思ひて、前よりも尙大に高く顯れて、大路を塞ぎ給へり。尊は猶も事とし給はず、走り越えて通り給ひけるに、引き給ひける足の先、大蛇にちと障りたりければ、其より頓てほとぼり上りて、五體身心忍び難く、打伏しぬべくおぼせども、心強におはしける程に、惱みながら近江國まで越え給ふ。道の邊に水の流れ出で、冷しく清潔なりければ、端なる石に腰をかけて、水に足を指し降して、寒し給ひける程に、立處にほとぼり醒めにけり。それよりして此水をば、醗井とぞ名づけたる。ほとぼり醒めたれども、御惱重かりければ、虜夷をば大神宮に奉り、武彦を以て此由を奏し給ふ。尊は猶近江國千の松原といふ所に、惱み臥し給ひけるが、松子の島に宿り給ひし岩戸姫は、尊の餘波を惜みつゝ、在りもあらぬ心地して、尋ね上り給ひけるが、近江の千の松原に御座しけり。尊は惱みながら思ひ出されて、戀しく思しける處に、岩戸姫來り給ひければ、あまりの悦ばしさに、「あは妻よ」とて、大に悦び給ひけり。其よりして東國をば、吾妻とぞ名づけたる。かくて日數を送り給ふ程に、尊は御惱重くならせ給ひて、終に失せ給ひにけり。白鳥となりて、南を指して飛び給ふ。岩戸姫は尊の別を悲みて、悶え焦れ給へども、其甲斐なき事なれば、泣々尾張國へ歸り給ひ



けり。尊に仕へる人々、別を悲み奉りて、跡目につきて行く程に、紀伊國名草郡に、暫く落ち留りけるが、此所を悪しくや思しけん。東國に飛び返り、尾張國松子の島にぞ飛び行きける。白鳥にて飛び給ひし時は、長さ一丈の白幡二流と見えしなり。尾張國に飛び落ちぬ。其所をば白鳥塚と名づけたり。幡の落ちける處をば幡屋とて今にあり。兵衛佐頼朝は末代の源氏の大將となるべき故にや、彼の幡屋にてぞ生れ給ふ。草薙劍をば桑の枝に懸け置き給ひしを、岩戸姫此を取り、紀大夫が田、一夜の内に森になりたる社の杉に寄せ置かれたるけるが、夜々劍より光立ちければ、彼の光、杉に燃えつきて、焼け倒れにけり。田に杉の焼けて倒れ入りたりければ、田も熱かりけるといふ心に、熱田とぞ名づけたる。日本武尊は、白鳥にて飛び落ち給ひて神になる、今の熱田大明神これなり。岩戸姫もあかで別れし中なれば、即ち神とあらはれ、源大夫も神となり、紀大夫も同じく神とぞあらはれける。さても草薙劍をば、寶殿を作りて置かれたるけるが、夜々に劍にひかり立つ、知法行徳の人ならでは見る事なし。しかも新羅の沙門道行といひける高僧の、日本に立つ劍の光を見て、帝にかたりければ、「何ともして彼の劍を取りて、我に與へよ」と仰せありければ、さては取りて進らせ候はんとて、日本にぞ渡りにける。尾張の熱田に詣でつゝ、彼の劍を七日行ひて盗み取りて、五條の袈裟に裏んで逃げける程に、劍袈裟を衝き破りて、本の寶

殿に返り入る。二七日行ひて劍を取り、七條の袈裟に裏んで逃げけるに、劍又七條をも突き破りて寶殿にかくる。道行尙立ちかへりて、三七日行ひて、今般は九條に裏んで出でける間、袈裟をも破る事を得ずして、筑紫の博多まで逃げ歸りたりけるを、熱田明神安からぬ事と思召し、住吉大明神を討手に下し、道行を蹴殺して、草薙劍を奪ひ取る。帝生不動といふ將軍に、七の劍を持たせて、日本へぞ渡しける。生不動既に尾張國まで攻め來る。熱田の神宮悪き奴かなとて、蹴殺し給ひにけり。所持の七の劍を召取りて、草薙劍に加へて、寶殿に祝はれたり。今の八劍の大明神とは是なり。代々かくこそありしに、後の寶劍も靈驗劣り給はず、平家取りて都外に出で、二位殿腰に指して海に入る。上古ならましかば、失ふべきにあらず、末代こそ心憂けれ。潛する海人に仰せて、是を求めさせ、水練を召して尋ねれども見えす。龍神是を取りて、龍宮へ納めければ、終に來らざりけり。其比或人の夢に見けるは、草薙劍は、水風龍王、八岐大蛇と變じて、素盞鳴尊に害せられ、持つ所の劍を奪はる。此風水龍王は、伊吹大明神たるに依りて、不破關に蛇となりて、日本武尊の伊勢大神宮より天叢雲劍を賜りて、東夷のために下國しけるを、留め取らんとし給ひけるも協はず、御上りの時待ち儲けて、奪ひ返さんとし給ひけるも殺されけり。生不動八歳の皇と顯れて、本の劍は叶はねども、後の寶劍を取り持ちて、西海の波の底にぞ沈み給ひける。



終に龍宮に納りぬれば、見るべからずとぞ見えたりける。さて九郎大夫判官義經、平氏の虜共相具して、關東へ下向ありけるが、梶原の讒言に依りて、腰越に關を居ゑて、鎌倉へは入れられず。判官本意なきことに思ひて、起請文を書きて度々進らせられたれども用の給はず。力及ばず、空しく都に上りける時、箱根權現に參りて、兄弟の中和げしめ給へとて、薄緑の劍を進らせらる。土佐房昌俊都に上り、謀らんとしけれども、判官心得給へば、爲損じて、土佐坊鞍馬の奥、僧正谷に籠りたるけるを、鞍馬法師昔の好ありければ、搦め取りて判官に奉る。中務丞知國に仰せて、六條西の朱雀にて誅せられけり。關東より重ねて、討手上洛の由聞えければ、義經五百餘騎船に乗りて、西海へ赴き給へども、大風に逢ひつゝ、難波の浦にさすらひ、靜といふ白拍子ばかりを具して、芳野山に入り、其後北陸道にかゝり、奥州まで落ち下り、秀衡入道を憑みて、三四年は過ぎにけり。文治四年四月廿九日、五百餘騎にて攻めけるに、判官は泰衡に向ひて「軍して何か爲ん」とて女房二十二、若君四歳、當歳の姫、我身三十一と申しけるに、自害してこそ失せにけれ。中も直らぬものゆゑに、劍を權現に參らせけるも、運の窮めとぞ覺えける。建久四年五月廿八日の夜、相模國會我十郎祐成、同五郎時致が、親の敵祐經を討ちける時、箱根別當行實が手より、兵庫鏢の太刀を得たりければ、思ふ様に敵をぞ討ちたるける。此太刀は九郎判官の權現に進らせ

たりし薄緑といふ劍、昔の膝丸これなり。親の敵、心のまゝに討ちおほせて、日本五畿七道に名を揚げ、上下萬人に讃められけるも、此劍の用なりとぞ聞えし。その後かの膝丸、鎌倉殿に召されけり。鬚切、膝丸一具にて、多田の満仲、八幡大菩薩より賜りて、源氏重代の劍なれば、暫く中絶すといへども、終には一所に經廻りて、鎌倉殿に參りけるこそ、めでたかりけるためしなりけれ。



平家物語 下編終

いてふ本校訂者

沼波瓊音

山田美妙

杉谷代水

泉斜汀

山内素行

石村貞吉

山田三子

所金藏

村上靜人

郷白巖

川添文子

昭和十年七月十八日印刷

昭和十年七月廿五日發行

不許

複製

發行所

いてふ本  
平家物語 下  
定價  
金五拾錢

編輯者 三教書院編輯部

代表者 鈴木種次郎

發行者 東京市中野區高根町六番地 鈴木種次郎

印刷者 東京市神田區錦町三丁目十一番地 白井赫太郎

印刷所 東京市神田區錦町三丁目十一番地 精興社

東京市中野區高根町六番地  
三教書院

營業所

電話中野二八〇四番  
振替東京四五八〇番  
東京市神田區錦町一〇八番  
電話神田二四〇八番



67  
415

いてふ本刊行の辭

現今の讀書界が嘗ての諸外來思想偏重より  
 騰つて、漸く自國の過去に於ける産物に對  
 して新たに注目し始めた事は、當然の推移  
 とは云へ喜ぶべき現象である。顧みて現時  
 の我國出版界を見るに、日々發行される書  
 物の如何に多いかは暫く措き、所謂實際に  
 類するものが非常に多く、やゝ見るべきも  
 のは概して高價なる爲一般的でないか、或  
 は豫約出版等により讀者の自由選擇を拒否  
 するが如きものが多い。弊院は右の缺陷を  
 除く意味より、此度多大の犠牲を覺悟して、  
 内容・装幀・價格の點に於ては、絶對に他の  
 追従を許さざる『いてふ本』の刊行を企て  
 た。蒐むるところ、古典といはず、輕文學  
 といはず、雅といはず、俗といはず、韻文  
 といはず、散文といはず、過去の日本が産  
 める文藝作物の一切はもとより、必ずしも  
 本邦を範圍とせず、漢籍中必讀のものを選  
 み、必ずしも文藝を範圍とせず、經世修養  
 其他の書を選び、廣く讀書界に提供し以て  
 現下の缺陷を補はむとす。大方の御支持を  
 期待して已まない所以である。

昭和十年五月

三教書院主

いてふ本書目

昭和十年  
六月出來のもの

古事記	全	武經七書	全
萬葉集	上下	唐詩選	全
枕草子	全	三體詩	全
平家物語	上中下	曾我物語	上下
徒然草	全	雨月物語	語全
神皇正統記	全	附世間猿蓑道隱耳	全
附吉野拾遺	全	日蓮大士眞實傳	全
近松心中物	全	新編水滸畫傳	一
西鶴物	全	東海道中膝栗毛	上下
俳諧七部集	全	修紫田舎源氏	一二
蕪村七部集	全	釋迦八相倭文庫	一二
武將感狀記	全	いろは文庫	上下

和裝の表紙は始めに絲の綴目の處にしつか  
 りと折り目を付けて下さい。さうすれば表  
 紙に皺がよらず耐久力は殆ど永久的です。





終

